２０１３年度　長野県山岳協会　総括報告

登山は今や多様化して、様々の人が様々なタイプの登山を志向しています。大別すると「高峰やより困難な登攀を目指す卓越登山」、「健康のための登山」、「競技登山」に分けられると考えられます。そのような登山界において、我が国登山界を牽引する責任組織として、長野県山岳協会の上部団体である日本山岳協会は、昨年から公益社団法人へと変わりました。「安全登山の啓発」「山の環境保全」「山岳文化の発展」のため、社会に親しまれ、登山界に期待されるような日本山岳協会を目指すというのが、その本旨です。しかしそれは、山好きが集まって作ってきた任意団体としての本来的な意義、すなわち我々自身の登山の充実、足元の山岳会の活性化があったればこそということは言うまでもありません。

長野県山岳協会もこの立ち位置を十分意識し、「登山活動を行うための山岳協会であること」という原点に立って加盟団体、会員の皆さんの協力を求め、未組織登山者にも長山協の活動を広くアピールしながら長山協の活動を進めてきました。「入山料」、「入山規制」、「山の日」など山をめぐる問題がクローズアップされる中で、社会的にも認知されている山岳団体として、関係機関からもコメントを求められるなど責任ある対応を求められましたが一定の考えを伝えることができたのではないかと考えています。

新たに導入した個人会員には、県内外の19名の方が入会されました。会員にはタイムリーな情報発信を心掛けたところ、長山協事業への参加なども見られ、概ね好評でした。中高年を中心に未組織の登山者へのアプローチとして今後の展開次第ではかなり有効に作用するものと思います。次年度以降は会員同士の横のつながりを持てる機会を作りたいと考えています。通常の活動では、それぞれの支部、委員会等と協会が連携をとりながら、事業を展開しました。山岳会の衰退の中で「協会」の役割が見えにくくなってきた昨今、協会員のニーズを正しくつかみ、それに沿った形で一人ひとりの顔が見えるような運営をしていくこと、会の横のつながりを作っていくことがこれまで以上に求められていると考えています。

登山の普及・技術の向上・啓発活動

登山の普及は、協会加盟団体の活動そのものであると同時に、協会、加盟団体の持てる力の社会還元の二面を持っています。夏山登山教室については、各支部がそれぞれ重要事業として捉えて実施しました。今年度も県の遭難防止対策協議会から補助金をいただきましたが、経年的に行われてきた実績に対しその意義は社会的にも充分に理解されています。

指導委員会と遭難対策委員会では、ここ数年の流れを受け、5月の針ノ木でのキャンプ、山岳総合センターとのタイアップによるレスキュー研修会（夏冬２回）、長山協キャンプでの合同研修会を実施しました。また2年目を迎えた「ウインターミーティング」は山小屋泊という参加しやすい形が功を奏し、親睦を深めながら技術を高める機会が増えたと好評でした。

自然保護委員会では、今年度23名が日山協自然保護指導員資格を取得するという新しい動きもありましたが、新年度は各自の活動に任せる形での一年となりました。来年度は組織的な活動が期待されます。

ジュニア委員会では山岳総合センターとの共催、競技部との共同歩調によるスポーツクライミングを主体に人工壁だけでなく自然の岩場も活用した中高生の育成への取り組みを継続し、国体等でも活躍する選手を育ててきました。経年的に行っているフリークライミング強化プロジェクトの成果が現れてきており、岩場で登れる若者が育ってきています。また、2008年から始めたジュニア層へ野外活動の素晴らしさを伝える取り組みは６年目を迎えました。山岳総合センターともタイアップしながら、地道に成果を積み重ねてきています。

競技登山

国体での、成年男子笠原大輔、中嶋徹組のリード２連覇、ボルダリング２位という結果は明るい話題でした。フリークライミング強化プロジェクトの成果が目に見える形で現れたものといえます。快挙を成し遂げた成年男子はもとより、チーム長野として北信越を勝ち抜いた少年男子、惜しくも出場権を逃した少年女子の皆さんの活躍

にもこの場を借りて拍手を送ります。一方で成年女子がエントリーできなかったことは今後の課題となりましたジュニア委員会と競技部が合同で行っている強化の結果が現れてきています。強化に当たってご協力をいただいているクライミングジムにも感謝申し上げますとともに、関係の皆さんにも心から賞讃の拍手を送ります。

しかしながら、現在活躍している選手に続く選手層の薄さや大会運営をする予算的裏付け等が十分とは言えず、課題も多く抱えていることをこの場で指摘しておきたいと思います。また、審判員の育成に関しても昨年度に引き続き取り組みましたが、現実問題として広く協会内に認知された取り組みにまでいたってはいないのが現状といえます。その意味で、夏に予定されていた第2回長野県子どもクライミング大会が台風の影響で中止にせざるを得なかったことは残念なことでした。この取り組みはクライミングの普及という意味では画期的な取り組みであり、次年度以降も継続的に実施していくことが望まれます。

全国高等学校総合体育大会では、松本県ヶ丘高等学校の山岳部男子が優勝校にわずか0.25点の僅差で準優勝を果たしました。これもまた特筆に価する快挙でした。高校登山部の活性化に地道に取り組んでおられる顧問の先生方、また県内高校生にとっては大きな励みとなりました。

日本山岳協会主催による「第８回山岳スキー競技日本選手権大会」は「第４回山岳スキー競技アジアカップ」を兼ねて小谷村において開催されました。爆弾低気圧の通過という最悪の状況下、北信越ブロック、長山協加盟団体ほか多くの関係の皆さんのご協力で安全を最優先に、成功させることができました。

国際登山・国際交流

昨年度チベット登山協会と2018年の兄弟協定締結30周年に向けて精神の確認をし、具体化に向けて活動をはじめました。その具体化として羊八井キャンプ参加を計画しましたが、参加者が集まらず見送りとなりました。中華民国登山協会から合同登山訓練の申し出があり、指導委員会の協力を得ながら2月に実施しました。例年にない大雪の中、訓練は成功し、今後にもつながる成果を挙げました。

事業部

山のセミナーについては、事業部が企画調整を行い、今年も単日日程で行いました。協会内の複数の委員会がかかわりながら、広く「山」を考えるセミナーとなりました。今年度は協会外の講師を3名依頼し、参加者から資料代を一部負担していただきましたが、内容も濃く好評でした。

医科学

登山者の立場にたった医科学委員会であるために、やまなみでの情報提供ならびに山のセミナーでの講演会を企画しました。

事務局（総務・財務・やまなみ・ホームページ）

収入収支については、理事などの個人負担も少なからず残る中、ここ数年の電子化により財政的にはゆとりが生まれている一方で、一方通行のメールは情報伝達という点で紙ベースの情報のような確実性に欠け、周知徹底が十分図れていない現状が生まれています。重要な情報は、郵送・メール便等を使いました。「やまなみ」は予定通り4回の発行を行いました。また情報提供は各会へのメール、FAX、「長山協メール通知サービス」および協会ホームページを活用して行ないました。

山岳総合センター

山岳総合センターの指定管理２年目は、関係の皆様のご協力で順調に事業を行ってきました。より認知度も高まる中、主催事業は質量ともに向上し、受講生はもとより、社会的な評価も高まっています。

山岳図書資料館

開館2年目を迎え、少しずつ認知度も上がってきています。利用者も安定的にあり、今後も山岳博物館ほか関係者との協力の下に資料の充実、適切な運営に努めることが肝要です。